

## 帰還された方・移住された方のお声



Aさん（40代 女性）  
平成23年夏 A県へ母子避難  
平成26年冬 福島県に帰還

原発が爆発したとき、私のお腹の中には、私たち夫婦にとって初めての子どもが宿っていました。「豊かな環境で子どもを育みたい」そんな思いで、自然豊かな場所に家を買って求めた直後でもありました。

当時の福島には「危険」「安全」両方の意見がありました。私たちが夫婦は「万が一の場合を考えよう」と、私だけA県に避難することに決めました。

避難当初は、放射線への恐怖やストレスから解放さ



れたと、夫と離れての出産への不安や寂しさより、安心できる環境で出産育児ができることへの喜びが上回っていました。

その後、避難先で無事に長男を出産し、そのまま2年以上、避難先で過ごしました。

しかし、子どもが成長するにつれ、週末だけしか一家揃って過ごせない避難生活をいつまで続けるのか、悩むようになりました。

結果、福島の自宅ではなく、比較的除染が進んでいる地域に新たに家を借り、家族で生活することを選びました。放射線への不安は消えませんが、我が家なりに悩んだ末での決断でした。



Bさん（30代 女性）  
平成23年春 B県へ一家避難  
平成24年春 B県に移住

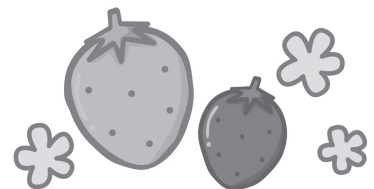
震災後すぐに、生後4か月の子どもを連れて家族でB県へ避難をしてきました。避難による混乱と、慣れない土地での生活が続きましたが、避難からしばらくして子どもの保育所への入所をきっかけに移住を決断し、2年経つなかで、ようやく日々の生活を取り戻しつつあります。

B県は失業率も高く、地元の方々でも就職活動に苦戦している中で、言葉や地域の壁などもあり主人の就業は容易でなく、仕事が決まるまで苦労の連続でしたが、現在は家族と共に歩む生活を支えに、一步一步前を向いて歩んでいます。

震災による被害、原発事故による様々な被害や

影響、不安、怖さを感じている中で、移住したことにより解放された部分と、逆に新たに発生した不安とが常に隣り合わせの生活を送っています。

先のことを考えれば考えるほど、気持ちが詰まってきてしまい、閉塞感を感じてしまいます。今はまだ子どもが小さいので、まずは日々の生活を家族で過ごすことを最優先に考え、子どもが小学校へ進学するタイミングで、改めて家族でゆっくりと考えていきたいと思います。





Cさん（30代 女性）  
平成23年夏 C県へ母子避難  
平成23年春 福島県に帰還

避難した当初、帰還するタイミングは、「天気予報で放射線量の数値発表が無くなったら」と考えていましたが、1年、2年と経過しても新聞やニュースに数値発表が続いたので、それを基準にすることはやめました。

子どもたちの成長は早く、これ以上、かわいい盛り子どもたちとお父さんが離れて暮らすのは可哀想だと思い、帰還を決めました。

福島県や市の行政からは、帰還の参考となるような私たちがほしい情報は全く得られず、相談できる窓口もどこにあるのか



わかりませんでした。災害が起こる前に、ずっと通っていた市内のカフェのママから地元の話を聞いたりするしかありませんでした。

原発事故が無ければ何事もなく変わらず住んでいただろう場所に戻る事ができてよかったとは思いますが、でも、せっかく長い期間避難していたのに自宅の除染はまだ行われていなかったし、市内の中では線量が低いために平成27年以降になると言われました。

避難先では当たり前だった「放射線が気にならない生活」から「放射線を気にしなければならない生活」に変わったことは、嫌だと感じます。



Dさん（40代 男性）  
平成23年夏 D県へ一時保養  
平成23年秋 D県に移住

D県に移住をしようと決断したのは、放射能汚染や放射線による被曝に対する不安からです。何もないかもしれないし何かあるかもしれませんが、それを言い出したらキリがありません。放射能汚染や放射線による被曝に関する講演会に行き、いろいろな人の話をたくさん聞いたり、ネットで調べたりしました。福島県に問合せもしましたが、自分にとって明確な答えは得られませんでした。判断は難しかったのですが、いずれにせよ不安を抱えて生きていくよりは思い切って動こう、と移住を決めました。

移住して、子どもが気兼ねなく外で遊んでいる姿を見て「良かったな」と思いますし、人生を本気で見つめることができました。それでも最初は

「東電や国のせいでこんなことになって自分はなんて不幸な人なんだろう」と思っていました。でも、あるとき「なんで誰かのせいで自分が不幸にならなきゃいけないんだ。幸せの選択をするのは自由だ。自分で幸せになるための選択を探していけばいいだけのことじゃないか」と思ったとき、気が楽になりました。

原発のこと以外に戦争で苦しんでいる人もいます。いろいろな苦しみや悲しみがあり、どれだけ辛いかはその人にしかわかりません。どこにいても、自分の判断、自分の選択を信じればいいのかと思います。

